

# 闊紋枯病に関する研究

## 第1報 病原菌について (1)

西沢正洋\*・松岡正則\*\*

NISHIZAWA, T. & MATSUOKA, M. Studies on the Stem Rot of Mat Rush  
(*Juncus effusus* var. *dicipiens* BUCH.) (I)

### 1. On the Causal Fungus, *Rhizoctonia* sp.

病徴及び発生状況：闊紋枯病は筑後地方で“ブチ”と云われ“黒ブチ”と“赤ブチ”の2種がある。前者は健病部の境が暗黒色を呈した明瞭な病斑を形成する。後者は健病部の境が不明瞭で僅かに淡紅色を呈している。本年は（昭和30年度）6月24日に著及び葉鞘に病斑を認め病原菌 *Rhizoctonia* sp. を分離しえ、闊紋枯病である事を確認した。なお発病部位は地際より5～15 cmの処に最も多く観察された。

接種試験：供試菌は *Rhizoctonia* sp. では九大保存菌R-1, R-2, R-4, 九州農試分離菌R-5, R-6, 岡山農試分離菌DM-20と *Corticium sasakii* (九州農試分離菌) 以上7種を供試した。供種品種；大莖3号。

試験方法及び結果：接種試験I；闊を500 ccのビ

ーカーに移植活着後、茎間に馬鈴薯煎汁寒天培養基に27°Cで3日間増養せる供試菌を挿入接種し殺菌綿で湿布し25～26°Cに保ち、6月7日に第1回、6月28日に第2回の接種を行った。接種試験II；2万分1ワグネルポットを用い供試菌は30日間27°Cで稲藁培養し7月27日茎間に撒布接種した。本試験は九州農業試験場圃場で行った。接種試験III；5万分の1ワグネルポットを使用し接種試験Iと同様な方法で6月22日接種しポットを福岡県農業指導所圃場に置いた。接種試験IV；接種試験Iと同様な方法で10月9日に接種し25～26°C接種箱中に保った。調査は接種後10日目に行つた。

試験結果は第1表～第4表の通りである。

考察：前記病徴“黒ブチ”を対称とした接種試験では九大保存菌中R-2が発病率高くまた昭和30年

\* 九州農業試験場      \*\* 福岡県○業指導所

第1表 接種試験結果 I

菌番号	接種月日	調査莖数	罹病莖数	罹病莖率 (%)
R-1	1955. 6. 7	14	3	21.4
R-2	1955. 6. 7	9	8	88.9
	1955. 6. 28	30	19	63.3
R-4	1955. 6. 7	9	0	0
R-5	1955. 6. 28	38	27	71.1
R-6	1955. 6. 28	45	32	71.1
DM20	1955. 6. 7	9	6	66.7
	1955. 6. 28	52	29	69.0
無接種	1955. 6. 7	9	0	0.0
	1955. 6. 28	43	0	0.0

福岡県農業指導所圃場より採集せる罹病莖及び葉鞘よりの分離菌 R-5, R-6, は他の供試菌に比しやや高い発病率を示した。なお接種試験 II, III における発病葉鞘率と発病莖率は略併行し、罹病葉鞘の多いもの程莖発病が増加する傾向があり、一般に本病発生圃場においても同様であつた。稲紋枯病菌 *Corticium sasakii* を圃に接種した結果の病徴は前述の“赤ブチ”類似の病斑を形成し、本菌は“赤ブチ”病斑の一因となるのではないかと思われる。なお伝染源となる稲紋枯病菌核は従来の形成部位被害髓内以外に地上莖または莖と葉鞘間にも形成され、これが水面並びに地表に落下し、次期の伝染の一原因となるのではないかと思われる。

第2表 接種試験結果 II

菌番号	調査莖数	罹病葉鞘数	罹病莖数	罹病葉鞘率 (%)	罹病莖率 (%)
R-2	176	87	33	49.4	18.8
R-5	143	94	46	65.7	32.2
R-6	116	64	34	55.2	29.3
DM20	99	53	27	53.5	27.2
無接種	132	0	0	0.0	0.0

第3表 接種試験結果 III

菌番号	調査莖数	罹病葉鞘数	罹病莖数	罹病葉鞘率 (%)	罹病莖率 (%)
R-1	31	4	0	12.9	0
R-2	27	23	5	85.2	18.9
R-4	40	4	0	10.0	0.0
DM20	30	22	3	73.3	10.0
無接種	29	0	0	0.0	0.0

第4表 接種試験結果 IV

菌番号	調査莖数	罹病莖数	罹病莖率 (%)
R-5	65	37	56.9
C. sasakii	79	56	70.9
無接種	73	0	0.0